令和６年度第１回岡山市総合教育会議

日時：令和６年８月27日（火）

場所：市庁舎　第３会議室

午後３時34分　開会

○司会　それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和６年度第１回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長　問題ないですよね。では、お願いします。

○司会　はい。傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。

市長、よろしくお願いいたします。

○市長　はい。それでは、議事に入りたいと思います。

本日は、学力の向上に向けた取組について報告をしていただきまして、今後の課題、取組の方向性などについて議論をしていきたいと思います。

今日は、学校現場における取組、ご提案など、幅広いご意見をいただくために、岡山市中学校長会の佐藤会長、そして岡山市小学校長会の半澤会長にもご出席をいただいております。２名の方々にも議論に入っていただきたいと思います。

それでは、お二人の自己紹介からお願いしたいと思います。

まず、佐藤会長、お願いいたします。

○佐藤中学校長会長　皆さんこんにちは。本年度、岡山市中学校長会の会長を務めさせていただいております京山中学校の佐藤でございます。今日はよろしくお願いいたします。

昨日から中学校は始業式で始まっておりまして、本日は自己診断テストということで生徒たちも頑張っておりますので、私も今日頑張りたいと思っております。よろしくお願いします。

○市長　はい、よろしくお願いします。

半澤会長、お願いいたします。

○半澤小学校長会長　皆様こんにちは。本年度、岡山市小学校長会の会長をさせていただいております岡山市立鹿田小学校の半澤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

鹿田小学校は、この市役所も学区に入っております。卒業生として有名なのは大森市長でございます。それから、一昨日、日曜日に女子プロゴルフがありましたけれども、優勝した桑木志帆選手も鹿田の卒業生と伺っております。

今日はこういった場にお招きいただきまして、ありがとうございます。頑張っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○市長　新しい情報をありがとうございました。

それでは、早速議事に入ります。

協議事項、学力の向上に向けた取組について、教育長から説明をしてください。

○教育長　はい。それでは、学力の向上に向けた取組について。

全国学力・学習状況調査、岡山市学力アセスの結果を踏まえた分析と今後の取組についてご説明いたします。

資料の１ページ、まず資料１をご覧ください。

令和３年から７年の第２期大綱の取組について、学力の向上に関連する目標と現在の達成状況を示しております。達成状況と調査結果の分析について、４ページの参考資料１の表やグラフと併せてご覧いただければと思います。

それでは、指標としている全国学力・学習状況調査の偏差値は50以上であり、目標を達成しております。次に、記述式問題の正答率の対全国比は１以上であり、目標を達成できておりません。探求的な学習をしている児童・生徒の割合は全国平均レベルを下回り、これも目標を達成できておりません。

１ページの中段辺り、調査結果から分かることですが、平均正答率が全国平均レベル以上を継続していることについて、基礎的な知識、技能を問う問題の平均正答率が向上していることから、基礎学力の定着が図られていると考えております。また、昨年度、岡山市学力アセスで課題であった小学校６年生の算数、去年の５年生の算数の実態から向上したことが要因の一つであると考えております。無回答率については、国語の無回答率に改善が見られていることは成果であると考えていますが、対全国比や数学については課題が残っていると考えております。引き続き課題となっている記述式問題の正答率が全国平均レベルに達していないものがある。そのことについては、目的や意図に応じて自分の考えを

伝えることなど、深く考えて表現することなどに課題があると考えています。

成果のあった小学校６年生の算数が向上した要因として考えられることを左下の枠にまとめております。各学校の取組については、後ほどの協議の中で校長先生方からもお話しいただきたく思いますが、岡山市の課題について校長会を通して共有し、各学校の課題について学校全体で授業改善等の取組を行い、基礎学力の定着が図られた成果であると考えております。各学校での好事例を岡山市内の学校へと展開したいと考えております。

引き続き課題となっております記述式問題の正答率が全国平均レベル以上については、右下の枠のような学習が十分でないことが要因ではないかと考えております。そこで、２ページ、資料２にある３点、目的や意図に応じて自分の考えをまとめること、自分の考えが相手に伝わるよう工夫して表現すること、知識を活用して深く考えることを岡山市の課題としてまとめました。これらの課題は全ての学習の基盤に関わる課題ですので、解決に向けた授業改善を全教科、全教員で取り組んでいきたいと考えております。

具体的な取組として、教育委員会では次の２つについて取り組みます。１つ目は、主な課題の解決に向けて提案する授業の作成、展開です。子どもたちに必要な力を育成するためには、何より授業の充実が必要です。国語、算数、数学だけでなく、特に中学校ではその他の教科についても、課題に示す３つの学習を充実させた授業づくりについて、学校と共同で研究し、市内の学校へ広げていきたいと考えております。２つ目は、ＩＣＴを効果的に活用した授業改善の促進です。昨年度に引き続き取り組みます。そして、授業改善の方向性を先生方と共通理解を図るために、教育委員会からの情報発信や研修の充実に努めます。教育委員会からの提案授業を基に学校は全教科で実施することで課題解決を図っていこうと考えております。

３ページの資料３をご覧ください。

さらに、岡山市が目指す自らの個性を磨き、選択と挑戦を繰り返すことができる子どもの育成に向けた児童・生徒一人一人への働きかけについて、キャリア教育の充実を図りたいと考えております。岡山市の子どもたちは、全国学力・学習状況調査において、自分には良いところがあると思うや先生は良いところを認めてくれているについて肯定的な回答の割合が高い傾向にあります。一方、将来の夢や目標をもっている、人が困っているときは進んで助けている、人の役に立つ人間になりたいと思うは肯定的な回答が低い傾向にあります。特に将来の夢や目標をもっている、これはもっていないという回答だけを上げていますのでかなり低いのですが、参考資料の１の５番、質問調査、将来の夢や目標をもっ

ているというところで、小学校80.2%、中学校63.4%。これは、おおむねもっているも入れるとこのパーセントになりますが、どうしても全国平均よりも下がっております。

先ほど半澤校長からありましたが、今日も市役所へ来られていました岡慎之助さん、金メダルを取られた体操選手ですけど、４歳からもうそういう体操選手の目標や夢をもっていたと聞いております。先ほど申された桑木プロゴルファー、女子の方ですが、この方も目標をもって進んでいって結果を出されていると。私なりに考えますのが、誰かに憧れてそうなりたかったというのはちょくちょく聞くわけです。やっぱり憧れが多ければ多いほどいいのかな、憧れる人、憧れる職業、そういったものを多くの子に触れさすということが改善の一つになるのかなと思っておりますが、この点は少し教育委員会の考えを申しますが、皆さん方から意見をいただきたいところでございます。

我々としては、子どもたち一人一人の自己理解や社会貢献、キャリアプランニング等に働きかけるキャリア教育の充実を図ろうと考えております。これにより自分の目標をもち、学習への動機づけや個の学びの充実となることを期待しています。

具体的な取組の方策としては、１つ目は岡山市学力アセス、生活状況調査の効果的な活用です。学習面については岡山市学力アセスの個票で、生活面については生活状況調査の個票で自分の得意、不得意、良さを知ることができます。学力アセス、生活状況調査の個票を基に自己分析できるように取り組んでいきたいと考えております。

２つ目は、全国的に取り組まれておりますキャリアパスポートの見直しと活用です。キャリアパスポートについては、各学校において既に実施しているところでありますが、全ての学校において充実した取組となっているわけではありません。キャリアパスポートの内容を整理し、先ほどの学力アセス、生活状況調査の自己分析も含めて、今後活用できるような取組を進めたいと考えております。

以上のことから、第２期大綱の学力に係る３つの目標を達成し、激しく変化する社会の中で一人一人が個性を磨き、様々な場面で選択と挑戦を繰り返すことができるよう取り組んでいきたいと考えております。

説明は以上です。ご意見、ご協議よろしくお願いいたします。

○市長　ありがとうございました。

それでは、意見をお願いしたいのですが、その前に、今日２人の校長さんがおられます。また、教育委員の方も長くいらっしゃる方ばかりではありません。少し今までの経緯といいますか、お話を申し上げたいことがあります。

実は第１回の総合教育会議のときの最大の議題は、子どもたちの学力を向上させることでした。それはなぜかというと、偏差値ベースでいくと小学生も中学生も48、全国最下位のレベルでありました。では、なぜそうなっているのだろうということで、教育委員会の皆さん、また教育委員の皆さんに十分議論していただきました。結果的に非常にうまくいったのですけれども、何が問題だったかというと、若い先生方が非常に多い。若い先生方というのも優秀な方が多いのですけれども、ただ一人一人の先生に授業を任せていた。その先生も優秀ではあるが、経験は少ない。そういう中で悩みながら授業をやっていた。それをちょっと是正していこう。一つには、教育委員会と学校との関係を強化する。校長、教頭と教員の関係を強化すると。これも定量的な数字で何週間に１回とか、校長さん方であると１週間に何回とか、そしてどんな授業を行っていくのかアドバイスをしていく。こういったことで標準レベルになっていった。ここからは偏差値を上げるのが我々のミッションではないかと。一定の標準的な学力を身につけたということであれば、将来を生き抜くことができる子どもたちをつくっていこうではないか。これが第２期の目標であったわけであります。非常に簡単に言うと、今みたいなのが私の10年間の認識であるわけです。

これから今後の方向について議論をさせていただく前に、今日、中学校長会の会長と小学校の校長会の会長お二人がおられますので、実態について少しどんなことに今なっているのか、お話をいただければなと思います。その実態をお伺いした上で、教育委員の皆さん方にお話をいただければなと思っております。

佐藤さんからお願いできますか。

○佐藤中学校長会長　はい。中学校のほうの実態といいますか、本校のことが中心になるかと思うのですけれども、やはり若い先生方の授業力を上げるということは大切だということというのは本当に感じておりまして、教育委員会のほうから出ている「授業これだけは！」と「授業これだけは！＋PLUS」というめあてとまとめと振り返りという授業の型、基本的な型というものを先生方に共有していただくというところが大きかったのではないかと思います。校長が学校を回って授業をアドバイスするにしても、まずは子どもたちと一緒に到達目標を決めている、振り返っているというところが分かりやすい説明ができたので、そういう型を教えていただき、その型を学校全体で共有して進めていくというところが、進んでいる取組ではないかなと思っているところです。

○半澤小学校長会長　小学校のほうですけれども、小学校は、資料１のほうにあります昨年の岡山市の学力アセスの偏差値48というのが我々にとっては非常にショックな数字でし

た。昨年、校長会に指導課長さんが来られて、こういう実態ですと。これは全市がそうですと。このままで行くと来年は50を切る可能性が非常に高いですというようなお話をされました。先ほど市長さんのお話にもあったのですけれども、実は全国学力・学習状況調査で令和元年度からずっと小学校は50を切ったことがないっていうことで、逆に言うと私たちからすると50は当たり前の数字になってきていたのです。50というのは当然クリアしなければいけないところ、私たちの意識の中で平均はあるべきものと。それが50を切るかもしれないという非常に危機的なお話を伺ったときに、これではいけないよねと。やっぱり50にはしないといけないでしょうというような思いを校長全員が思ったと思います。

その話をうちの学校に帰って職員にしましたところ、先生たちもやっぱり同じような思いでした。50は当然あるべきだし、実は本校も50を切っていましたので、何とかしなきゃいけないよねというふうな話でした。具体的に、では昨年の５年生、今の６年生の子どもたちにどういったことをしたかというと、これも聞いてきましたけれども、特別なことはしてないですと。ただ、要は平均50にいってない子どもたちですので、分かってない子どもたちが目の前にいる、そういう思いで授業は構成しましたと。なので、授業の導入であったり、最後のまとめの確認であったり、そういったことはすごく丁寧にやってきたつもりですというふうにうちの職員は申しておりました。そのあたりの教員の意識が、50は当たり前だというような意識が今回のいい結果につながったのではないのかなと思います。

それから、先ほど中学校の佐藤校長先生のほうも言われたのですけれども、やはりめあてとまとめのある授業、それから振り返りということは小学校でも大切にしていますし、そのあたりのところがじわじわと効いてきていると思います。

○市長　ありがとうございました。

もう一点ちょっとお伺いしてよろしいですかね。今両先生からおっしゃったのはどちらかというとマクロの議論で、それぞれの、例えば半澤さんがおっしゃったのは、うちの子たちが全体で50っていう、そういうことの達成かどうかというそういう議論で、実際はミクロの積み上げであって、ミクロっていうと個人個人ですよね。個人個人の立ち位置っていうか、自分たちがどうすべきなのかとか、今の国語の自分の能力っていうと岡山市内ではどういう位置づけなのか、全国ではどういう位置づけになるのか、そしてこれはどこまで必要なのかよく分からないのですが、学校なんかの位置づけだってあると思うのですけど、そういった自分がこれから向上していく、切磋琢磨をしていこうというときに、現状が理解できてないとなかなか次のステップには行けない。それが教育委員の皆さん方と今

の小学校、中学校の子たちと多分状況が大分変わっているので、そういう自らの立ち位置を、ないしは学校の立ち位置をどういうふうに子どもたちが知り得ているのか。特に中学校が、大分成長してきて義務教育を卒業していくということになってくると、より子どもたちが知りたがるというか、知っとかなきゃならないというか、逆にね。そんな気もするのですが、そういったミクロの議論というのはどうなっているのか、少し教えていただければと思います。

○佐藤中学校長会長　子どもたちが受けたテストの結果を子どもたちが見ることができるので、自分の場所を知ることはできると思います。

　それから、あとは、中学校というのはどうしても自分の位置というか自分の将来を見るということが大切になってくるので、中学校を旅だった後、そしてどういう大人になっていくかというときに、自分は今の実力だと自分にとっていい道はどこを選ぶことだろうか、ゴールはここなのだけど、こう行くのがいいのか、自分はこう行かなければいけないのかというところは、やはりそれぞれ懇談とか情報を交換するところでそれぞれの生徒について話をして、進路を選ばせるというとこで一応確認させているというとこになりますかね。

○市長　でも、例えば70点を取ってきたとすると、この70点がこの学校の中で一番いい点数なのか、それとも最下位なのか、違いますよね。そういう相対評価っていうものは、点数を渡しただけでは分からないですよね。そういったところ、京山中学校だと、ではここはよかったけど全国へ行ったらどうだとか、いろいろなのがあるではないですか。その全てが分かる必要はないと思うのですけども、どういったところまで子どもたちはそれを理解しているのかっていう点についてはどうなのでしょうか。

○佐藤中学校長会長　最近は、誠に言いにくいのですけど、非常に細かいところまでは伝えておりません。大体大まかなところから知るという。

○市長　大まかって具体的にどんなイメージ。

○佐藤中学校長会長　平均点はこうですよとか、度数分布はこうですよというあたりから理解するようになっていて、個人的にあなたは何点だから学校の何位ですというようなことを最近は伝えるようなことはしていないというのが現状です。

○市長　分かりました。

　半澤さん、何かありましたら。

○半澤小学校長会長　先ほど佐藤校長先生も言われたのですけども、個人の立ち位置につ

いては、やはり個票が返ってまいりますので、それを見て大体自分はここが、例えば算数でいうと図形が少し弱いとか、逆に計算はすごくできているっていうことは分かると思います。

それから、学校全体としての課題もそういうものが出ますので、学校として、うちの場合ですと図形が特に弱いっていうところがありますので、そこを丁寧にやっていくということをしていたと思います。

それから、相対的な位置関係っていうのも、小学校で順番を出すわけではありませんので、先ほどもありました度数分布表の中で大体この位置にいるのだなっていうことを、本人は伝えませんけれども、教師のほうがこの子はこういう位置にいるなっていうことを分かった上で指導しますので、その一人一人の子どもに対する言葉がけですとか、それから課題の出し方っていうことは工夫をしているというふうに思います。

○市長　ありがとうございました。

今の実態が大分教育委員の皆さん方にもお分かりいただいたのではないかと思うのですが、先ほど教育長が話をした内容、そして校長先生のお二人の話、それらを踏まえてご意見をいただければと思います。

では、石井さん、ベテランから行きます。

○石井教育委員

まず、今回の学力状況調査で、引き続き偏差値50を、５年連続というふうに伺っていましたけれども、キープしているっていうのは、今後個人の個性を磨く上での基本となる力を一定程度ずっと保っているという意味において、やっぱり継続性をもって取り組めているということに価値があって、皆さんの取組の成果ではないかなというふうに感じております。

あと、先ほど相対的な位置づけのお話も出ていましたけれども、小学５年生以下でやる学力アセスというのは、もともと岡山市独自のテストを先生方がつくられてやられていたと思うのですけども、それをこの何年かで全国的な調査のものに変えたということで、そこで個別につくる予算というのもあったとは思うのですけども、相対的なことがより早い段階で分かるということを、方針に切り替えられたということは、今回の小６に向けたときの調整に向けて非常に役に立ったのではないかなというふうに感じております。

そういう中でも、市長もおっしゃられていましたけど、教育委員会と校長会、それから先生方の連携っていうのは、第１期の教育大綱をつくった当時の頃と今でいくと、よりそ

の連携度が高まっているような雰囲気というのをすごく感じます。当初というのは、学力ももちろん大事だけど、もっと大事なことがあるとか、学力だけ高めることはどうなのかっていうところぐらいの意見もちらほら伺っていたような気がしますけども、もちろんそれも大事だと思うのですけども、今はそれが当たり前のことというふうなことでお話もあったので、すごく変わってきて一体感が出てきたのではないかなというふうに感じました。

○市長　では、片山さん、お願いします。

○片山教育委員

本当に心配な学力に関して、小学校５年生から６年生になる難しい、勉強としては、多分学習内容としては難しくなる中で50を達成していただいたというのは、本当に一保護者としてもありがたいと思うし、子どもたちも点数が個々に上がっているっていうお子さんがきっと多いと思いますので、それがまた自信につながって、ありがたいだろうなと、うれしいからもっとやる気につながる、達成感とか成功体験というのは次のやる気につながっていくだろうなというふうに思います。

また、今年度、夏休みに子どもたちがパソコンを借りて、１人１台の端末をお借りして帰ってきて、細やかに先生たちがそこにメッセージをくださるっていうのが、夏休み、なかなか学校と、部活はあっても先生とつながるってことがない中で、週１回は学年主任の先生から配信があったり、それに返信をしたりとか、９月、新学期になるに当たって課題はできているかとか、小まめに声をかけてくださるっていうのがすごく寄り添ってくださっているし、子ども、今日はちゃんとつないで見ないといけないっていうようなことを言って、その辺すごく先生方が小まめに子どもたちの個々に関わってくださっているっていうのがよく分かって、ありがたいなというふうに思いました。

一方で、その相対評価ということに関しましては、やはり親としては子の点数、あなたはどう捉えるのっていうところを、中学校に娘も、下の子もなってきたので、やっぱり言いたいところなんですね。そう言うと何ていうふうにうちの子なんかは返してくるかというと、もう恥ずかしいのですけど、スマホなんかをみんなが持っているって子どもが言うと、みんなではない、あなたが持つかどうかとか、うちがどうするかだからっていう話をする中で、相対評価でテストの点はどうって、何でそこを人と比べるのっていうことを言うんですね。なので、何でそこを人と比べる必要があって、スマホを持っている、持たな

いの占有率、何か持ってない子のほうが少なくなってきている状況もあったりして、そこは結構厳しいなと思っています。ちょっと太刀打ちならないところもあるのですけれども、親としては高校受験を経験させていただいた上の子を考えると、やっぱり相対評価というのは意識しておかないと、常日頃、特に岡山市は私が育った山口と違って、やっぱり日々の学習の態度とか成果っていうのをすごく大事にされるのだなと。一発で入試に通ればいいだろうっていうことではなく、保護者の私自身も日頃からの積み重ねの大事さというのをすごく感じさせていただいたところなのですけれども、そういうところでやっぱり学年進行に伴って相対評価をすることの意味とか意義とか、そういったことも少し、親が言うとなかなか聞かないので、全幅の信頼を置く先生方からその大事さを伝えていただくことっていうのも本人に響くかどうかっていうとこにつながっていくかなということを思います。

○市長　非常に赤裸々な、ありがとうございました。

それでは、上西さん、お願いします。

○上西教育委員　まずは感想ですが、学力が偏差値50を超えていると、平均を超えているということは、すばらしいことかなと思っています。やはり個性も当然大切ですが、最低限の基礎学力って非常に重要だと思いますので、これが継続していい結果が出ているというのはすばらしいことかなという感想をもっています。特に話題になっております小学６年生の算数。実は私の子どもも去年小５で、今年小６。うちの子も頑張ったのかなって思っているのですけど、この話の中でちょっと印象的だったのが、半澤さんが先ほど特別なことはしていないのだと、だけど分かってない子がいるということを認識して授業をしたというお話があったと思います。私すごくそこは印象に残っていて、やっぱりそこは丁寧な授業につながったのではないか、というふうに思っています。やっぱりできる子は、ほっといてもやります。ちょっと苦手な子とかにどれだけ限られた時間の中で丁寧に説明ができるかということが非常に重要なことだと思いますので、もちろん模範的な授業、提案授業とかもありますが、そういうことも大切ですが、やっぱり一人一人の先生が少し丁寧に教えてあげるという姿勢が非常に重要なのかなというふうに感じました。

もう一つは、相対評価の要は順位の点ですが、私の時代などは、当然おまえは何番だという結果が知らされました。苛酷な現実を突きつけられてきて、今の子はたしか450点以上は何人で、425点から449は何人でみたいな、何か枠の人数で何となく推測させるようになっていると。子どもは楽観的に見ていますけど、より良いように解釈できるような遊び

があるようになっていますけど、私、何か別にあれをやるのであれば順位を教えてあげてもいいのではないかと、同じことかなと思うし、人によってはやる気を出すかなとは思うので、それがなぜああいう枠での取扱いになっているのか、少し疑問かなというのは感想としてもちました。

○市長　ありがとうございました。

では、門原さん、お願いできますか。

○門原教育委員

この結果を聞いて、本当に先生方の不断の努力と、それから教育委員会も協力をして、とても頑張ってこられたという敬意を感じておりまして、教育委員として非常にうれしく思います。特に授業の型をきちっと示すことで児童と生徒と先生の共通言語もできましたし、それから先生方と管理職というか、その指導をする先生方との共通言語もできて、そういうところがあると評価もお互いにしやすいですので、子どもも自分が今日はめあてができてなかったなとか、今日は振り返りが弱かったかなと、ああいうところが分かるっていうことがすごく大事ではなかったかなと思います。それを丁寧にされたことがすごくうれしかったですし、50は必ずという学校の組織力ですよね。一人一人が他人事ではなくって、特に授業力は若い先生方がとおっしゃっておられましたけれども、一人一人ばらばらな授業、良い授業をするのではなくって、やっぱりみんなが50は必ずだよねっていう、分かってない子どもがいるよねって、そこを基準にして取り組まれたっていう、やっぱり学校の組織力も向上していかれたのではないかなと思います。今チームとしての学校っていうので多職種連携も言われていますけれども、まずは学校内でのそういうチーム力っていうのを上げていかれたことが、やっぱりこの子どもたちにもいい影響を与えてらっしゃるのかなと思いました。

市長さんが自らの立ち位置ということをおっしゃったのですけど、私ちょっとおかしいことを言うかもしれないのですけど、学力の立ち位置だけではなくて、やっぱり自分の強みと弱み、それは人間性とか道徳性とかそういうことの強みと弱みを子どもたちが意識していることが今後すごく大事になってくると思うのです。そうすると、自分の強みはここだから、これに向かって夢を実現するためにはどういうふうなことを勉強していけばいいかっていう。やはりみんな同じ勉強をするのではなくって、これから夢を実現するための自分はどういうふうに学びを、大谷翔平さんが自分の書いてらっしゃいますよね、目標シート、ああいう感じで何をすれば自分が近づいていけるかっていうようなことをしていく

ことがひいては学力向上につながっていくのではないかなと思いました。

教育長さんが夢や憧れをもつっておっしゃったのですけど、もう一点は、もった相手ではなくって、周りの支える人がいて、本当にサポートがなかったら岡選手もあんなにはならなかったと思うのです。なので、子ども一人一人のところで将来の夢や希望をもっていて、人が困っているときは進んで助けるとか、役に立ちたいと思うというところで、自分だけがそう思うのではなくて、何か行動を起こしたときにありがとうとか、うれしかったよとか、そういう周りの人の声かけとか、特に先生が支えてくれるみたいなのがあったと思うのですけど、やっぱりそれは先生だけではなくて子ども同士も必要だし、家庭や地域も子どもを支える温かい言葉かけというか、サポートするようなことがやっぱり子どもを伸ばしていくので、今後はその方向も少し考えていって、遠回りであるかもしれませんが、それが意欲とかやる気とか学力向上につながっていくのではないかなと私は思っています。

○市長　様々な視点から意見をいただきました。

ここで教育長も多分ご意見があると思うのですが、教育委員会の日々先生と接触をしている、次長でも指導課長でもどちらでも、今の話を聞いて何かコメントがあればお願いできますか。

○教育次長　私は、学校のほうに訪問させていただいて、少しはというか、学校の現場の様子を見させていただく中で、ちょっとお答えと離れるかもしれないのですけれども、一番今回感じているのは、こうやって授業の型もそうですけれども、学力の考え方というか、目標も含めて、岡山市の本当に強みだと思うのですけれども、そうやって全員がそこを意識できている現状が生まれている。これが全ての結果の元になっているのかなというのを改めて感じさせていただきました。これは引き続き皆さんのご意見をいただきながら、校長会そして学校の先生方にしっかり共有を続けて、この思いをつなげていく必要があるなと改めて感じたところでございます。

それから、相対的な部分についてなのですけれども、いわゆる苛烈な競争社会というような視点の部分に対する教育的配慮というところから、度数分布というような形などを通して工夫しながら学校現場に、学年、子どもたちの状況に応じて進めているというのが現状でございまして、そういった立ち位置の工夫を示しながら、やはり個別の良さというか、子ども自身の良さというものにしっかり、全体的な部分と先ほど言ったミクロの部分でも教育としてはしっかりサポートしていかなければいけないと考えているところです。

その一つとして、今回資料３にありますように、キャリア教育のキャリアノートというかパスポート、こちらの活用もひとつ充実させることで、ミクロの部分、より充実しているのではないかなと考えているところでございます。

○市長　ありがとうございました。

これから二巡目なので、もうランダムでやっていただければと思うのですけれども、私が皆さんの意見を聞いた中で非常に共感を覚えるというか、片山さんがおっしゃったやる気につながる手法っていうのは一体何が一番いいのだろうかと。それも、門原さんがおっしゃったように、単にもう人間、子どもでも自分に何ができるか、そして何ができないかっていうのはある程度は分かっている。先ほど半澤さんから、私、鹿田小学校の卒業生だっていう話がありましたけど、卒業のときの文集みたいなのがあるのですね。10年ぐらい前に読んだ覚えがありますけど、やっぱりこういう文章の世界では私は無理だなと。弱みのほう、そういうことも感じたことはありますし、やっぱりそれぞれ自分は自覚を、ある程度は自覚していく。それをより自覚させて自分の強みを伸ばしていく。弱みを補っていくというところもあるとは思いますけど、そういうのに一体どういうことをやれば、型っていう議論もあったし、導入と確認っていうのもありました。それぞれが有益だとは思うのですけれども、せっかくのこういう会議であります。上西さんからはこういう一定の幅でやるのだったら順位を教えてやってもいいのではないのっていう話もありましたし、何を少しでも変えていけばいいのか。実はこの前の政令市の市長さんの集まりがありまして、昼御飯を食べながら何人かの市長と話をしていたのですが、市によっても大分違っていますね。名古屋市とかさいたま市、神戸市なんかと一緒だったのですけどね。だから、それぞれの教育委員会がいろいろ議論して整理をしているのだろうと思うのです。今日結論を出す必要は全然ないと思うのですけれども、そういう示唆的なものを何かいただければ、この問題というのはもう非常に重要な問題なので、次の作業にしてもいいのではないかなと思います。何かあればご指摘をいただければと思いますが。

○教育長

まだ市長からやる気につながるとか出たら、あとは好奇心しかないのですけど、去年から「やる気につながる好奇心」ということで、そもそもベースになるのは、私が思うのは幼少期の「なぜ」、「どうして」という疑問、それが分かったときのうれしさ。やっぱりそれを消さないようにするというのが一番だと思っていて、それが学びの原動力になっていると思います。それが満たされないときにやっぱり周りがどう支えるかっていうのは出

てくるのですけど、先生方の授業の話も出たのですけど、この間も大学３年生の「夢への扉」いう会で話もしたのですけど、やっぱり子どもがわくわくする授業をしてほしい。そのためには、先生がこれは子どもが喜ぶぞというわくわくするような授業を組み立てないともうどうしようもないですから、先生方が本当に好奇心をもって、子どもたちがこれをやったら喜ぶだろうなっていうことをしてくださいよっていうのが私どもベースなのですけど、それも本当に地道にやっていかないと、一朝一夕にはできないと思っています。

あと、立ち位置についてですけど、私の頃の順位は、当然昭和ですから出ていましたけど、多分これは、小学校はなかなかその順位を伝えるというのは発達段階もあって難しいのだと思うのですけど、中学校は受験があるので、そのあたりが各政令市、市で違う面はあるのかなとも思うのですけど、私もその議論は十分把握してないのですが、一回順位を出すと、常に下位の子がやる気を失うのではないかなって。逆に全員一律に順位を見せてしまうと、上の子はいいのですけど、下の子をどうフォローしていくかというようなことが実際起きるのかなというのは、僕も中学校の教員ではないので、そのあたりは中学校の現場の方か指導主事の方に後で聞きたい面はあるのですけど。それを昔は多分物すごくメンタル的に耐えられる子どもが多かったのが、もう印象ですけどね、やっぱり耐える力が我々昭和の時代から今の時代の子どもに変化があるので、一気には難しいのかなっていう思いはあるのですが、受験があるからそのあたりは本当に中学校の先生はジレンマだらけだとは思います。

ただ、門原さんが言われた自分の強みと弱み、その辺は分かった上で職業を選ばないと、昔聞いた話で、コミュニケーションが苦手な若干発達障害のある子どもがマクドナルドの店員になりたいと、憧れで。だけど、コミュニケーションが苦手。本当に仕事に就くと、すぐ辞めるっていう。それは、本当にその子だけではなくて、周りの人があなたはこっちがいいよとか、あなたはここが得意だっていう支える人がやっぱりキーマンかなというのは僕も思いまして、そのあたりどう進めていくっていうのはありますが、私の思いを伝えさせていただきました。

○市長　ほかに何かご意見はございますか。

では、中原さん。先生でない立場の方のご意見をお願いします。

○総務局長

子育ても経験しまして、やっぱり学校の順位、親は結構気にはなっていたのですけど、確かに階段式にパーセント、ここにあなたはいますよっていうのをたしか小学校のこ

ういう統一テストのときにもらったかなと思いました。あと、お話に出ていた達成できているかどうかのグラフというか、蜘蛛の巣みたいな、皆さんお話を聞きながら懐かしく思い出していました。

やっぱり自分がどういうふうに育ってきたか、子どもの育ちも見てなのですけど、やっぱり好きなことは好きだし、苦手なことは苦手だし、ただそこを上手に周囲のサポートがあって、でこぼこ、少しはならしつつ、それでも優れたところを伸ばしていければ、それはすごく自分の将来につながるのではないかなと、そういうふうに、聞かせていただいていました。

○市長　やる気につながるのがどういうやり方があるのかということで、片山さん、何かくださるなら言ってください。

○片山教育委員

私もよく分からないです、正直。ですけれども、私は日頃は幼児教育に携わっているのですけれども、もう基本的に幼児教育は遊びを中心とした指導をします。あと、環境を通しての指導ということで、子どもたちは毎日何をしようかなっていうわくわくでやって来ることができる園をつくる、そういう環境をつくるというところで、やる気のない子どもたちってのはあまり見ないです。やっぱり最初の４月とか５月はお母さんと離れにくいとか環境に慣れにくいってことはあるのですけれども、一旦自分の好きなことができると分かった子どもたちは生き生きとしてきて、作った作品は壊してくれるな、明日も残しといてほしいとか、もう遊びをやめるよって言っても、まだもうちょっとって言って絶対やめないとか

ところが、小学校に上がると、ここがまた幼児教育の大事な部分なのだろうなと思うのですけど、教科の中でやっぱり食わず嫌いなものもあるだろうし、ちょっとやってみたら苦手だなっていうのもあって、小学校は今随分低学年を工夫してくださっているっていうふうにお聞きするのですけれども、まず座っておくこと。苦手だなと思う教科にも取り組んで、短時間であっても座っておく。そこで達成感と申しますか、何か苦手でやったけどもできたとか、やっぱり幼児教育で大事にしている先生に褒めてもらうとか認めてもらうっていうことが小学校でも中学校でも、高校に行っても、先生がこういうふうに言ってくださった、日頃何も帰って言わない子どもが、帰ってきて、今日先生にこういって言われたんよって言われたら、自分に対するポジティブなメッセージなんですね。やっぱりそのポジティブメッセージっていうのは、たとえ苦手なことに取り組んだときでも、自分がや

ってみてできたことを人に評価してもらえるっていうのはすごく力になるのだなっていうのは思います。

なので、良さを生かすとか苦手っていうのを知るということも大事なのだけれども、食わず嫌いではなくて、様々なことに触れてみるっていう、その挑戦ということがすごくやっぱり大事で、その挑戦を繰り返すっていうことと、私、その繰り返すためには失敗経験をいかに生かすかっていうのはすごく大事かなと思うのです。失敗は失敗ではないというか、失敗の中に、そのことは駄目だったけど次に方向転換するとか、もう一度違うやり方をしてみるとか、何かそこって、うちの子なんかもそうなのですけど、すぐ諦めてもうこれは駄目って言うんですよ。もうこれで駄目なのではなくって、何か次にもう一回できないかって考えようよ。幼児期はそのあたりすごく自分のしたいにつながってくる。例えば勢いよく上から水を流したいとかっていうと、もうといを使って砂場でもさんざんやり尽くします。いろいろなあの手この手でどうやったら水が最後まで流れ切るかとか、ああいうとことんやり続ける時間と、それから見守る人とアイデアを出す人と、そこはもう子どもたち同士もそうだし、先生もそうだし、みんなが一丸となって同じことを協議し合うとか、多分あれが協働的な学びの形なのだろうなと思うのですけれども、何かそういうチャンスといいますか、失敗の中からはい上がるといいますか、岡選手も何か足をけがされて上半身を物すごくその間鍛えられて今の自分があるっておっしゃっていたのを私テレビで拝見してすごく感動したのですけれども、そこで諦めない忍耐力、さっきもおっしゃっていた耐える力とか、粘り強さとか、何かそういう頑固さというのか、そういったものをしっかり育ってほしいなということを思います。

○市長　はい、佐藤さん。

○佐藤中学校長会長　やる気につながる手法というとこで考えてみたのですけど、中学校でいろいろな体験をさせることが大切なのではないかなと思っています。例えば京山中学校では探究の学びをしているのですけど、その学びを自分が好奇心とか課題をもってまとめたものをみんなに聞いてもらう。聞いてもらって、選ばれてもっと大きなところで発表するという機会が与えられるとか、それから学級弁論大会をしているのですけど、みんなの前でしゃべるとかという何かやってみて認められるということが大切なのではないかなと思います。

実は一つ今日聞いたエピソードがあって、京山中学校がおかげさまで口腔衛生優良校に選ばれまして、表彰式があったのです。そのときに私ではなくて保健委員長に挨拶をして

ほしいというオファーがあって、保健委員長さんが大変いい挨拶をして、今日、学年の先生にあれは大変いい挨拶だったって聞いたよって聞いたら、あの子がですかって言われて、彼は歴代の中で一番頑張ってほしい保健委員長さんだったっていうのを後から聞いて、やっぱり舞台が与えられて認められたら人って力を出すのだなと思って、そういうところがやる気になるのではないかなと思うので、機会と舞台をしっかり与えてあげることが重要なのではないかなとお伺いしながら思いました。

○市長　はい、佐藤さんがお話しされたので。

○半澤小学校長会長　はい。先ほどの片山委員さんのお話を聞いていて、小学校ってそうですよねって。教科になって急にハードルが一気に上がって大変だな、子どもたちは思っているのだろうなというふうに話を伺わせてもらったのですけれども、１年生の担任を見ていますと、ここだけの話ですけど、うまい下手がやっぱりあります。経験値の差がどうしても出ています。ベテランのうまい先生は、やっぱり後のフォローがすごく丁寧です。できなかったときにここまで頑張ったよね、今度できるよっていうような声かけがすごくうまいです。経験値が少ないとどうしてもそのあたりのその肝というか、声かけが若干弱い。なので、子どもが次にやりたくないっていうようなことになっているっていうところはあると思います。

それから、失敗経験っていうお話もされたのですけども、うちの学校では先生たちにお願いをしているのは、学校は間違えていい場所なのだっていうことは常に思っていてくださいと。新入学の保護者の方にもお話をしているのですけども、子どもたちは間違えますと。今の世の中、どちらかというと何でもかんでもうまくやんなきゃいけない、失敗したらネットでも何でもたたかれてしまう。そういうふうな世の中だからこそ学校というのは間違えていい場所だし、そのために先生っていう大人がそばについているのですっていうようなお話をさせてもらっています。やっぱり子どもって間違えていいっていうふうにならないと伸び伸び活動はできないと思いますし、自分がやってみようっていうやる気にもつながらないのかなっていうふうには思います。

○市長　ほかにどうでしょうか。

上西さんとか門原さん、何か追加で。

○上西教育委員

全く別の観点から、私はやる気の話を、この資料３ですかね、夢や目標をもっているとか人の役に立つ人間になりたい、その数値が少し悪いということと引っかけて考えたので

すけど、誰でも人の役に立てるのだと。社会の中で生きていくということで、いろいろな役割があると。もう勉強ができる人、コミュニケーションが得意な人、いまいち勉強はできないけど体力はすごくある人、いろいろな子がいて、それぞれいろいろな仕事があって、いろいろな役割がある。あなたもその役に立てるのだということをもっと教えてあげたらどうかと私は思います。そういう目標をもてるとなるとやる気につながるかなと私は考えています。だから、何をしたいかということも考えさせていいけど、あなたにはこういうことができるんだよと、何ができるんだよということが分かるように、社会の仕組みを教えるのか、職場体験を増やせば済む話か、何とも言えませんけど、そういう社会にはいろいろな人がいていろいろな役割があるんだよっていうことを中学生ぐらいになったら教えられたらいいのかなと思っています。

○門原教育委員　続けてなのですけど、今子どもたちというか、私も学生を教えていますけど、ゼロか100、もう途中過程はなしで、うまくいかないともう挫折感が大きくって、教員が接しているのですが、やっぱり自分を取り繕ったりとか、逆にへこんでしまったりとか、そういうことが起きるんですよね。よく言っているのは、過程を大事にしましょう、プロセスです。プロセスをやっぱり大事にする先生でないと子どものプロセスを褒められないよねって話をして、失敗じゃなくて、エジソンが言っているうまくいかなかった経験だよって言って、じゃあ経験だったら次どんなふうにできるかなっていうふうにプランが立てられるので、そこでＰＤＣＡが回せるので、そういうことを私は学生にも言っていますけど、子どもにも、うまくいかないのが当たり前で、ではうまくいかないときに何を考えるか。課題ですよね。課題解決型学習のような探究とか総合的な学習の時間も取り入れて、試行錯誤していく中で何が自分はできたかなとか、次もうちょっとこうすればよかったかなというあたりが何かうまく授業の中でも、そういう授業がありますので組み立てていくとか、ふだんの授業の中でも何か振り返るときにそういう振り返りをして、自分は今日こういうことができて、次のときにはもうちょっとこう、やられると思うのですけど、もしそういうところとかプロセスを褒めるところをやっていくのが大事だし、上西さんがおっしゃる役割というのは本当に大事で、人はもうみんな個性があって多様性なので、一人一人生きているから何か役割があるのだと思うのです。その辺のところを、やっぱりいつも頭に入れておいて、学力だけの物差しではない、ほかのスケールを考えていくということもやっていくことが、結局人を育てていくというか、より良い市民を育てていくというか、そういうことにつながっていくのではないかなって大きな夢をもっていま

す。

○市長　石井さん、どうですか。

○石井教育委員　皆さんのお話をお伺いしていて、身につまされる思いをしたというか、今私は事業をしていて会社で仕事していますけども、会社も今までと同じことをしていてはいけないので、いろいろな挑戦をしなきゃいけないっていうのが、各社多分そういう状況にあるのではないかなと思うのですけども、そのときに挑戦するときにやっぱり失敗を恐れたり、失敗を責められるとうまくいかないというような状況があって、今の企業の中で言われていることも、心理的安全性を確保しましょうという、失敗してもよくやったという、次の成功への一歩だという位置づけでの動きをしないと生き残っていけない状況があって、今お話を聞いていて、そういうのを小学校、中学校、そういう局面でそういうふうに育っていったら、会社に入ってきたときに、上の世代の人はちゃんとしていたのですけども、楽しみな状況というのは生まれてくるのかなとお話を伺いました。

それから、何人か出てくるスーパースターみたいな夢の実現の仕方というのもあると思うのですけども、それと自分を何かリンクさせられなくて、どうしたらいいのかとか戸惑っている子どもたちというのもたくさんいるのじゃないかなというふうに思いました。なので、上西さんもそういうことに関連したことをおっしゃられたのかもしれないのですけども、何かその夢の実現の在り方って、一般的なスーパースターの夢の実現じゃないやり方、どういうものがあるのかというものを見せてあげられたらいいのではないかなというふうに思います。

それから、いろんな今多様性のある将来のドアがあると思うので、学力に基づいた、学力の序列に基づいた夢じゃない、今回の偏差値50であったときに、その50を超えていたらいろいろな夢が多分あると思うので、そこを何かキャリア教育というかそういうところでもあるのかもしれないですけど、岡山市出身でいろいろな多様性のある社会人の方っていらっしゃると思うので、そういう方の情報のシェアというのがＩＣＴとかそういうものを利用してできたらいいのではないかなと感じました。

○市長　新たにいろいろなキーワードが出てきていますけども、追加して何かございますか。

今お子さんが小・中学校に行っている方、事務局の方で誰かいますか。

じゃあ、はい、教育長、指名してください。

○教育長　学校指導課長。

○学校指導課長　今日皆さんのお話を聞いて、今まで学校指導課が取り組んでいた方向性に間違いがなかったと大変心強く感じたところです。実は私が事務局に入ったのが平成22年なのですけれども、その頃というのは学力だけではなくて、実は問題行動も全国ワーストワンで、なかなか授業が成り立たないというようなそんな時代でした。それから比べると今予算を1.5倍ほどつけていただいていて、学力アセスも、先ほど市長が言われたような子どもの立ち位置が自分で学力アセスを受けることによってある程度つかむことができるのだけではなくて、それが平成29年から実施するようになったので、経年での変化を見ることができるようになったということと、実はもう一つ、私は教員にも基準というか物差しが必要なのではないかなと思っておりまして、実は学力の中でも英語の英検３級を取得している子どもの割合というのを国が調査で発表するのですけど、実は一昨年度までは全国を岡山市は下回っておりました。これは、教員の基準がばらばらで、はかる物差しがなかったんですね。昨年度予算をつけていただいて、ＩＢＡの調査をするということで、一気に達成率が53％まで、10％近く上がりました。これは、その学年の子どもの学力が優秀だったわけではなくて、先生方の見る基準が統一できた点が一つ大きいのかなというふうに思っています。近年いろいろ教育に予算をつけていただいて、学校現場もそういう意味ではすごくやりやすい状態にはなってきているのかなと思っていますので、今後もそういった面でのご支援をいただければ大変ありがたいなと思っております。

○市長

　他に誰かいませんか。秘書課課長補佐、何か。

○秘書課課長補佐

　私は、今中学生の娘がおります。学校は楽しんで行っているのですけれども、自分の価値観、友達との価値観の違いでいろいろ悩んだりしながら生活をしているところなのですけれども、子どもの意識で言うと、子どもは学校に行くのに勉強だけでなくって、部活のことだったり友達との関係の中でいろいろな自分の価値観を築き上げていっています。大人がこうすればいいのにと思ってアドバイスをしても、自分が納得しないとのみ込んで動けなかったりする。アドバイスしてくださる方はたくさんいるのですけど、やっぱりそれをどう自分の中に取り込めるかは子どもによっていろいろ違っていたり、あと親が聞いてうまくいくこと、それから逆に友達から話を聞いてうまくいくこと、先生の一言ではっと気がつくこと、いろいろあるので、やっぱりアドバイスも学校だけでなく、家庭だとか、友達だとか、いろいろな方向から入ればいいのではないかなと思います。

○市長　急な指名でなかなか立派にまとめられましたね。

　もう少し時間がありますから。

○教育長　いいですか。

○市長　はい、どうぞ。

○教育長　すいません。私ばかり話してもいけないのですが、今日聞いたキーワードで、半澤さんが最初に言った、もう小学校はずっと50を維持していて、ある意味マンネリ化していた状態だと思います。そこへ立ち位置が分かって意識をした。私、今日のキーワード、自分の中では意識するっていうところが大事かなと思っていて、何を意識するかっていうのが大事で、門原さんも言われた、半澤さんも言われた、学校は間違えていいところなのだっていうのを子どもに意識させる。でも、それが足りないのだなと思って、今日。その後、失敗や間違いから学ぶところだから間違えてもいいのだと。この意識付けは、子どもにとっては何か市長が言われるやる気につながるのではないかなと思いました。このキーワードをどう学校に下ろしていって、子どもたちに浸透させて、親にも浸透させて、もう間違いから学ぶというのは本当にそのとおりだなと今日思ったんですよ。間違えなかったら勉強にならないというぐらいの。例えば学校現場で言うと、理科の実験で、本当に教科書どおりの実験結果にならないのです。強引な先生はこうなるのだと教えて、私も昔そういう強引な教員でしたけど、でもそうならなかったとこから学ぶということをするべきだなと今日感じて、そのあたりは私、今後意識するっていうところは、自分もいろいろ意識して頑張っていきます。

○佐藤中学校長会長　私も、今教育長が言われた意識するということと、安心して失敗できるっていう環境を整えてあげたいなと。安心して失敗できると次を頑張ろうというチャレンジする気持ちが出ると思うので、そういうところを私も今後意識していけたらなと思いました。

○教育長　石井さんが言った心理的安全性いうのが確かにそうだなと思いました。

○市長　どうですか、ほかにご意見。よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長　では、まとめに入りたいと思うのですけれども、私は最初に佐藤さんが言われた型は重要なのではないかなと。若い先生は分からないですよね、どんなに優秀な先生であっても。事業経営だって同じだと思いますし、それは最初から急に社長になって云々といってやるっていうのはできやしない。弁護士さんだって、あれは法律というものがありま

すけど、準備書面の書き方だけでも全然また違うところもある。だから、優秀だから任せていいっていう話にはならない。だから、型をつくる。それも導入と確認でしたっけ。

○教育長　まとめ。

○市長　それが型であるわけで、その型もずっと同じでは面白くない。何か刺激を与えないといけないのではないかと。刺激を与えるキーワードっていうのが今さっきの幾つかあって、やる気をもたらすだとか、特に強みをどうの、弱みをどうするとか、そういったことがあるのではないかなと思います。今日はこれ以上の議論はなかなか進まないのかもしれないのですが、せっかくこれは年に１回の学力の向上の議論になってくるわけなので、今日のそれぞれの意見を踏まえて、事務方、総務局も入ってもらって、こういうやり方で型を少し変化させてみるとかそういったことがあっていいのではないかなと。そして、刺激を先生にも与える。先生に与えると、それが子どもに響いてくる。我々全体として、岡山市としてどういうふうに応援していくのかというのを決めていくというのがいいのかなと思います。

したがって、今日のああ、よかったねで終わるのだったら１時間半に意味はない。佐藤さんがこういうのを認識しますと、京山中学校だけがよくなっても意味がないですよね。岡山市ないしは県の教育委員会と話をして、県全体だとかということにもつながっていくこともあるでしょうし、取りあえず何らかの刺激を与えるような整理をしていただいて、次回なのか次々回になるのか分かりませんけれども、提案をしていただければと思います。ありがとうございました。

それでは、一応これからお互い活発な議論を通じて意思疎通を図っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

それでは、最後に何か今日言い忘れたというのがあれば。よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長　はい。それでは、事務局に進行を戻します。

○司会　ありがとうございました。

次回の会議は改めて通知させていただきます。

以上で令和６年度第１回総合教育会議を閉会します。本日はどうもお疲れさまでした。

午後４時50分　閉会